

共同研究成果報告書

作成日 平成 21 年 5 月 20 日

研究課題名	近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究					
所属研究部局 ・職名	文学形成研究系 ・教授		ふりがな	やました のりこ		
			研究代表者氏名	山下 則子		
研究形態	1. 基幹研究 2. 共同研究 (3.) プロジェクト研究 4. その他 ()					
研究の位置づけ	(1.) 中期目標・中期計画に記載 2. その他 ()					
研究期間	平成 16 年度 ～ 平成 21 年度 6 年計画の第 6 年次					
研究経費	年 度	研究経費	経 費 内 訳 (単位：円)			
			物品費	旅 費	謝金等	その他
	平成16年度	1,123,740	813,825	131,860	0	178,055
	平成17年度	2,732,762	2,280,420	86,550	0	365,792
	平成18年度	989,557	156,406	183,230	33,250	646,671
	平成19年度	293,788	277,788	0	16,000	0
	平成20年度	1,008,570	305,850	450,720	0	252,000
	平成21年度	1,094,375	600,234	212,880	0	281,261
総 計	7,242,792	4,434,523	1,065,240	49,250	1,693,779	

研究組織				
氏 名	所属機関・部局・職名	現在の専門	役 割 分 担	エフオート (%)
(研究代表者)				
山下 則子	文学形成研究系・教授	近世文学	統括及び絵本・浮世絵の見立ての研究	30
(研究分担者)				
武井 協三	文学形成研究系・教授	近世演劇	歌舞伎における見立ての研究	10
井田 太郎	文学形成研究系・助教	俳諧	俳諧・絵本における見立て・やつしの研究	10
加藤 定彦	立教大学・文学部・教授	俳諧	俳諧、やつしの通史的研究	5
原 道生	明治大学・文学部・名誉教授	近世演劇	やつしの浄瑠璃化の研究	5
延広 真治	帝京大学・文学部日本文学 科・教授	近世文学	滑稽本の見立ての研究	5
佐藤 恵里	高知女子大学・文化学部・教授	近世芸能	歌舞伎・民俗芸能での見立て・やつしの研究	5
新藤 茂	東京理科大学・非常勤講師	浮世絵	浮世絵における見立て・やつしの研究	5
安原 眞琴	立教大学・文学部・非常勤講師	近世初期文学	近世初期文学での見立ての研究	5
(研究協力者)				
金子 俊之	早稲田大学・文学部・非常勤講師	俳諧	俳諧における見立ての研究	5
光延 真哉	日本学術振興会特別研究員	近世演劇	歌舞伎出版物における、見立て・やつしの研究	5
(研究補助者)				
中島 次郎	総合研究大学院大学・大学院博士課程	近世文学	統括補助 (16・17年度)	5
光延 真哉	東京大学大学院 (当時)	近世演劇	統括補助 (18・19年度)	5
金 時徳	総合研究大学院大学・大学院博士課程	近世文学	統括補助 (21年度)	5
紅林 健志	総合研究大学院大学・大学院博士課程	近世文学	統括補助 (20年度)	5
合計 12 名				

【概要（背景と目的）】

- ・「背景」と「目的」は、概要の中に入れて記入している場合は、特立して記す必要はありません。
- ・半頁以上、1頁以内で記入して下さい。
- ・【全体の研究成果】等他の記入欄と同内容のことを書かざるを得ない場合でも、他の記入欄と数行にわたって同一内容（成果出版物の目次を記す等）になるような記入はしないで下さい。

国文学研究資料館では、平成16年度より第一期中期目標期間に入り、いくつかの研究プロジェクトが開始された。「近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究」プロジェクトは、山下則子を研究代表者として発足し、今日に至っている。発足当初から、ほぼ現行のスタッフによるプロジェクトである。

本研究の目的は、日本文学・芸能の作品形成の基盤となる表現方法を明らかにするため、古典文学・古典芸能・浮世絵などに共通して存在し、特に近世文芸に多く見られる特色ある表現方法「見立て」「やつし」に注目して、原資料や事例に即して実証的にこれらの研究をし、それによって日本文化への視座を提示することである。「見立て」とは「あるものを別のあるもので表す」ことであり、「やつし」とは古典大衆化、即ち古典的な権威あるものを現代的な卑近なものにすることを指す。どちらも、日本の特色ある表現方法である。

6年間の研究成果として、「やつし」の表現方法が日本の文芸全般にわたって広く見られる日本独特の表現方法であることが、俳諧・歌舞伎のみならず庭園文化等の多くの事例から確認することができた。一方「見立て」の表現方法は、近代になってから使用された文芸用語（和歌や浮世絵での用いられ方）と、古典文学の原資料中に見られる事例とが混在しており、「見立て」を古典事例の面から、画然と区別して扱うことは、多少の困難を伴った。しかし江戸時代中期以降に多様な作品に見られた「見立て」が、俳諧を淵源とする戯作の手法の1つである、という点については共通した認識を持ち得た。そして、多くの文学や絵画作品に、その「見立て・やつし」の観点から解釈を加え、歌舞伎の重要な表現方法である「やつし」芸についても、笑いと近接性を実証し、さらに、芸能と俳諧との近接性をも提示することができた。

具体的には、平成16年度・17年度・18年度・20年度・21年度に、プロジェクト報告書を作成し、年度ごとの研究成果を学会関係者に配布して意見をいただいた。これらのプロジェクト報告書には、合計16本の学術論文と、2つのシンポジウム記録が記されている。また、平成18年度には、春季特別展示「「みたて」と「やつし」—浮世絵・歌舞伎・文芸—」を行い、多くの観客を動員した。更に同年にシンポジウム「表現としての「やつし」と「みたて」」を開催して、海外からの参加者をも含めて多数の聴衆を集めた。平成19年度には、八木書店から『図説「見立」と「やつし」』を出版した。これは計8本の学術論文と、98点の図版解説から成っており、一般読者からも好評を博して多くの新聞書評に取り上げられた。

この日本文芸の特色ある表現方法の研究は、日本文化の特色への視座をも含むため、海外日本文学研究者達からの関心も高く、国際的なシンポジウムなどでも注目された。EAJSやAJLSでのシンポジウムや講演、コロンビア大学での特別講義の依頼、主にイタリアの日本文学研究者達との連携での数次の国際共同研究会などを開催し、反響をよんだ。

[全体の研究成果]

- ・この欄に、全ての出版物を並べて記入しないようにして下さい。出版物の一部分を記入することは構いませんが、成果物の一覧は、[成果出版物・論文等]の欄に記入して下さい。
- ・半頁以上、1頁以内で記入して下さい。

「見立て」「やつし」という表現方法に注目することによって、文学・芸能・絵画に共通して存在する、日本の表現方法を認識することができ、「見立て」「やつし」が異なる表現方法であることが明らかとなった。

特に「やつし」の表現方法は、日本の文化全般にわたって見られるものであり、日本独特の表現方法であることが、芸能研究・文学研究等の多方面から、具体的な事例を挙げて、詳細に実証された点が特記すべきである。また「やつし」の多義性が当時の辞典から証明され、「見立て」との混乱が、当時の意味を「やつし」が失ったためである、という推測も提示された。

研究成果物である『図説「見立」と「やつし」』所載論文は、俳諧・歌舞伎・庭園文化が「やつし」の観点から論じられ、10点の文学作品、4点の浮世絵が「やつし」の観点から解説されている。「見立」は歌舞伎・戯作・なぞなぞの観点からの論文と、15点の見立て関係資料解説、65枚の見立浮世絵の解説が付された。つまり作庭、生け花などの庭園文化、或いは蕉風俳諧の「わび」など、「やつし」の観点からその本質的なあり方が考察され、元禄期歌舞伎の「やつし」の表現は、「笑い」と結びついて演じられることが多いことなど、研究の進展が見られた。一方「見立て」に関しても、前代の和歌の隠喩や「ものは付け」「物合わせ」「尽くしもの」の表現方法も「見立て」に連なるものと位置付けられた。更に近世における様々な分野での「見立て」の表現の誕生と多様化は、初期俳諧の表現や雑俳の流行を背景とし、それらが芸能（歌舞伎・俄など）に取り入れられ、再び広がって文学に定着するような、文化の連関性が認められた。

江戸時代中期の戯作においては、「見立絵本」が多く作られ、それがその後の見立浮世絵などに影響を与えるのであるが、「見立て」作品が多く作られるようになった時期と、戯作が隆盛する時期とは一致している。そして、寛政期以降の文化の大衆化によって、「見立て」は単なる「謎解き」に近いものとなり、古典や歴史などの雅の伝統とは切り離された存在となっていった。

また、「見立て」の語が文芸の表現方法として認識されて、原資料に用いられるのは、近世俳諧が最初であり、中古和歌や浮世絵等の研究で用いられる文芸用語としての「見立て」は、近代になってから使われ出したものであることも明らかになった。つまり近代での文芸用語「見立て」の濫用によって、今日の「見立て」の混乱が招来された。

「見立て」「やつし」という表現方法に注目することによって、今まで看過されてきた多くの資料の意味を再発見することができ、「見立て」「やつし」という表現方法が日本文芸全体に深く関わるものであることを、改めて認識することができた。

【成果出版物・論文等】

- ・年次順に分けずに、【出版物】、【論文】、【その他（学会発表）（公開データベース）等】の区分で記入して下さい。記入内容は、出版物の場合は、書名（平成□□年□月、□□書房、全□□□頁）、内容（執筆者名、論文名）とし、論文の場合は、執筆者名、論文名、掲載誌名、巻号、最初と最後の頁、発表年月、査読の有無を原則とします。
- ・論文名は「 」に、書名・雑誌名は『 』に入れるのを原則とします。
- ・論文名や学会発表、データベース名は、一件ごとに「・」や①②③・・・を使って区別しやすいように記入して下さい。
- ・データベースは公開されているもののみ記載して下さい。

【出版物】

『図説 「見立」と「やつし」—日本文化の表現技法』（平成 20 年（2008）3 月、八木書店、全 255 頁）

（内容）

序文

はじめに

第 1 章 図版資料 解説

山下（高橋）則子／加藤定彦／安原眞琴／延広真治／武井協三／新藤茂

第 2 章 「見立」「やつし」への切り口

新藤茂「「見立」と「やつし」の定義」／加藤定彦「やつしと俳諧」／佐藤恵里「やつしと歌舞伎」／武井協三「「見立」と歌舞伎」／加藤定彦「やつしと庭園文化」／安原眞琴「なぞなぞと見立」／延広真治「見立と戯作」／高橋則子「「見立」と「やつし」〈試論〉」

あとがき 初出一覧 図版目録

索引

Summary

『近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト報告書』第 1 号（平成 17 年（2005）3 月、全 58 頁）

加藤定彦「《ヤツシ》から見た庭園文化—作庭・花道・盆石を論じつつ「見立て」に及ぶ—」／武井協三「国文学研究資料館蔵人形浄瑠璃見立て番付の紹介」／高橋則子「近世後期見立役者絵の解釈（1）」

『近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト報告書』第 2 号（平成 18 年（2006）3 月、全 56 頁）

新藤茂「やつしと見立の定義」「当館所蔵『役者見立東海道五十三駅』について」／加藤定彦「神話のヤツシとしての『義経記』『好色一代男』」／高橋則子「近世後期見立役者絵の解釈（2）」

『近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト報告書』第 3 号（平成 19 年（2007）3 月、全 109 頁）

加藤定彦・新藤茂・延広真治「シンポジウム 表現としての「やつし」と「みたて」」／佐藤恵里「研究会記録・元禄歌舞伎の「やつし」芸—「をかし」との結びつき」／武井協三「研究会記録・初期歌舞伎の「見立て」」／安原眞琴「なぞなぞと見立て・やつし（序説）—『絵本余所画鏡』を端緒に」／高橋則子「近世後期役者絵の見立（3）」

『近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト報告書』第4号（平成21年（2009）3月、全93頁）

井田太郎「記号の盆栽」／佐藤恵里「元禄歌舞伎の「やつし」芸—「をかし」との結びつき」
「研究会記録・やつし芸の粹取り—「賤（しず）がしわざ」の面白さ」／武井協三・ボナベントゥーラルペルティ・高橋則子「シンポジウム・芸能・文学における古典大衆化による笑い—17世紀から現代へ—」

『近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト報告書』第5号（平成22年（2010）2月、全53頁）

金子俊之「芭蕉発句の「見立て」表現—和歌・初期俳諧を視野に入れつつ—」／光延真哉「スペインサーコレクション所蔵『風流ぶたい顔』について」／高橋則子「黒本仕立地口絵本『ぢぐち』』について」

【論文】

- ・ 高橋則子「祐信絵本の古典当世化と見立」、『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂）、p 128-137、平成20年12月、査読有り
- ・ 高橋則子「「馬鬣」の光秀と皐月—歌舞伎『時桔梗出世請状』の素材—」『江戸文学』41号、p 121-136、平成21年11月、査読有り
- ・ 高橋則子「江戸の〈笑い〉の表現様式—番付と絵本—」、『日本の〈笑い〉—文学・芸能・絵画の表現様式を基点に』、p 37-53、平成22年3月、査読無し
- ・ 加藤定彦「「見立て」「やつし」という方法」、『俳句の広がり』、p 61-72、平成21年11月、査読有り

【その他（学会発表）】

（学会発表）

- ・ 山下則子「江戸時代の見立とパロディー—地口絵本を中心に—」・平成19年8月19日・カナダ、ブリティッシュコロンビア大学（アメリカ日本文学会 AJLS）
- ・ 佐藤恵里／武井協三／ボナベントゥーラ・ルペルティ／山下則子「芸能・文学における古典大衆化による笑い—17世紀から現代へ—」・平成20年9月21日・イタリア、サレント大学（ヨーロッパ日本学会 EAJS）・山下則子「〈見立〉による笑い」、佐藤恵里「〈俄〉と笑い」、ボナベントゥーラルペルティ「俳諧の笑い」と古典大衆化」、武井協三「17世紀歌舞伎の〈笑い〉から現代の〈笑い〉へ」

（特別講義）

- ・ 山下則子「「見立て」と「やつし」—浮世絵と版本—」・平成21年11月6日・アメリカ、コロンビア大学・50名

[展示・シンポジウム]

(展示)

タイトル、会期（期間）、会場、入場者概数

(シンポジウム・講演会)

タイトル、期日、会場、参加人数概数、個別発表者名・講演者名、個別発表・講演タイトル

展示に付随した講演などは、頭に「*」を付して展示の項に註記しても構いません。

(展示)

「春季特別展「みたて」と「やつし」—浮世絵・歌舞伎・文芸—」・平成18年5月10日～平成18年6月1日・国文学研究資料館（戸越）2階展示室・1,342名

(シンポジウム)

①「表現としての「やつし」と「みたて」」・平成18年5月17日・国文学研究資料館大会議室・176名・山下（高橋）則子「近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト」について、新藤茂「浮世絵にみる見立」、延広真治「戯作の見立」、加藤定彦「ヤツシの源流を探る」

②「日本の〈笑い〉—文学・芸能・絵画の表現様式を基点に」・平成21年9月23日・イタリア、ミラノ・ラ・ビッコカ大学・30名・ボナベントゥーラルペルティ「誹諧連歌の笑い」、山下則子「江戸の〈笑い〉の表現様式—番付と絵本—」、ダニエーラサドゥン「四日市万古焼きのエキゾチックな不思議な世界」

③「日本の演劇」・平成21年9月28日、イタリア、ヴェネチア大学カ・フォスカリ・50名・鈴木国男「宝塚歌劇団の100年戦略」、佐藤恵里「〈実は〉の構造—歌舞伎の〈やつし〉を遡る」、武井協三「人形浄瑠璃と〈見立て〉—碁盤人形について—」、ボナベントゥーラルペルティ「中世から近世へ—謡曲『蝉丸』から近松門左衛門の『せみ丸』へ」、ディスカサント小林健二

【研究会・資料調査】

年度毎に分けて日付順に研究会と資料調査を別々に記入して下さい。(研究打合せは記入しないこと。)

【平成〇〇年度】

(研究会)

期日、会場、発表者(報告者)とタイトル

(資料調査)

期日、調査先

【平成16年度】

(研究会)

- 7月23日・国文学研究資料館・山下則子「近世後期役者絵の見立」
9月22日・国文学研究資料館・加藤定彦「見立てとヤツシと一日本人の美意識から誹諧におよぶ」
1月19日・国文学研究資料館・武井協三「人形浄瑠璃の見立番付の紹介」・山下(高橋)則子
「近世後期役者絵の見立(2)」

【平成17年度】

(研究会)

- 8月2日・国文学研究資料館・新藤茂「やつしと見立の定義」
12月26日・国文学研究資料館・新藤茂「役者見立東海道五十三駅について」
12月27日・国文学研究資料館・加藤定彦「神話のヤツシとしての『義経記』『好色一代男』」

【平成18年度】

(研究会)

- 8月4日・国文学研究資料館・佐藤恵里「元禄歌舞伎の「やつし」芸—「をかし」との結びつき」
10月7日・国文学研究資料館・安原眞琴「近世初期の謎の本と見立て—『絵本余所画鏡』を端緒に」
1月10日・国文学研究資料館・武井協三「初期歌舞伎の「見立て」」・山下(高橋)則子「近世後期役者絵の見立(3)」

(資料調査)

1月13日14日大阪大学附属図書館

【平成19年度】

(研究会)

- 4月24日・国文学研究資料館・加藤定彦、武井協三、山下則子、光延真哉「研究成果物の内容の検討と出版についての討議」
6月28日・国文学研究資料館・滝口富夫(八木書店)、武井協三、山下則子「同上」
11月20日・国文学研究資料館・滝口富夫、武井協三、光延真哉、山下則子「同上」

【平成20年度】

(研究会)

- 5月19日・国文学研究資料館・山下(高橋)則子「「見立」と「やつし」〈試論〉」
9月3日・国文学研究資料館・佐藤恵里「やつし芸の粹取り—「賤(しず)がしわざ」の面白さ」・井田太郎「記号の盆栽—見立て・名所—」
12月26日・国文学研究資料館・金子俊之「芭蕉発句の「見立て」表現—和歌・初期誹諧を視野に入れつつ—」・山下則子「口合・地口と芸能—AJLS・EAJSでの発表報告を含めて—

(資料調査)

3月6日7日大阪大学附属図書館

【平成21年度】

(研究会)

- 7月29日・国文学研究資料館・光延真哉「スペンサーコレクション所蔵『風流ぶたい顔』について」・山下則子「『馬鬣』の光秀と皐月—歌舞伎『時桔梗出世請状』の素材—」
12月22日・国文学研究資料館・浅野秀剛「役者見立絵—その発生から定着まで—」・延広真治「『五百崎虫の評判』を読む」

(資料調査)

9月1日2日九州大学附属図書館、3月12日13日大阪大学附属図書館